

風姿花伝第二、  
物<sup>もの</sup>学<sup>まね</sup>条々

直<sup>ひた</sup>面<sup>めん</sup>

これ又<sup>だいじ</sup>大事なり。凡、元<sup>もと</sup>より俗の身なれば、易<sup>やす</sup>かりぬべき事なれども、不思議<sup>ふしぎ</sup>に能<sup>のう</sup>の位上<sup>あ</sup>がらねば、直<sup>ひた</sup>面は見られぬ者也。先<sup>ま</sup>づ是<sup>これ</sup>は、仮<sup>け</sup>令<sup>りやう</sup>、その物<sup>もの</sup>くに依<sup>よ</sup>りて学<sup>まな</sup>ばむ事、是非なし。面<sup>めん</sup>

〔口訳〕

直面も中々大事なものである。一体、直面物は大ていが俗人の身をまねるのであるから、俗人の役者が演ずるのは、極く容易な筈であるが、不思議に、芸の位が上達して居ないと、直面物を見るに堪へないものである。先づ直面物は、大体、その物々によつて、その真似をやつて行くより仕方がないが、その真似方に於て、面色まで似せるなどといふ道理はある筈がないのに、往々演者の常の顔付をかへて、表情を出さうとすることがある。かやうな演出は見るに堪へないものである。それで、

色<sup>しよく</sup>をば、似<sup>に</sup>すべき道理も無<sup>な</sup>きを、常<sup>かほ</sup>の貌<sup>かほ</sup>に変<sup>か</sup>へて、顔<sup>かほ</sup>氣色<sup>けしき</sup>を繕<sup>つくろ</sup>う事あり。更<sup>さら</sup>に見られぬ物なり。振<sup>ふ</sup>る舞<sup>ま</sup>ひ風情をば、その物に似<sup>に</sup>すべし。顔氣色<sup>かほけしき</sup>をば、如何にもく自<sup>をのれ</sup>なりに、繕<sup>つくろ</sup>はで、直<sup>すぐ</sup>に持<sup>も</sup>

振舞や風情に於てはその物に十分に似せるべく、顔の様子は、如何にも自分の顔つきのままに、少しも繕ふなどといふことなく、あたりまへにしてあるべきである。

つべし。

〔評〕 直面で問題となるのは、顔面表情を忌む事である。これは今日でも原則となつてゐる。表情を顔面にあらはさないで、それで居て曲の感じを出すといふ所に、演者の芸位の高さが要求せられるものと思ふ。